

甲ノ原遺跡発掘調査概報

昭和 55 年 3 月

隱岐島後教育委員会

例　　言

1. 本書は、隱岐島後教育委員会が国庫補助を受けて、昭和54年度に甲ノ原遺跡において実施した発掘調査の概報である。
2. 調査は、近い将来に予想される開発にそなえて、遺跡保護対策を立てるための基礎資料を得る目的で行なわれたものである。
3. 調査組織

調査指導	勝部 昭	島根県教育委員会文化課係長
	石井 悠	" 文化財保護主事
	松本 岩雄	" 主事
調査委員	若林 久	隱岐島後文化財専門委員
	倶岐 豊彌	"
調査員	木瀬 一郎	隱岐島後教育委員会社会教育課係長
	脇田千代志	" 主事
	横田 登	" 嘴託
調査補助員	永見 英	明治大学文学部
事務局	斎藤 真	隱岐島後教育委員会社会教育課長
	龟井 操	" 職員

4. 調査にあたり、船田勉、常角チヨウ各氏をはじめとする土地所有者の方々、および下西区長芝岡徳長氏には終始献身的な協力を頂いた。また、発掘調査、遺物整理にあたっては、松島春和氏の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
5. 現場における発掘作業に参加、協力された下記の方々の名を記し、感謝の意を表する次第である。

(敬称略、五十音順)

上野時枝 小田原秋子 河北アヤ子 河本ヨシ子 芝岡徳長 中西町子 船田ユキ子
前田秀子 室山みどり 吉田ヌイ子 吉田ヨリ

6. 本書の編集、執筆は、調査指導の先生方の助言を得ながら木瀬一郎、横田登があたった。
7. 採図中の方眼方位(実測方位)は磁北を基準とし、矢印は真北を指す。なお、西郷における磁気偏角度は N 7° 0' E である。
8. 本書中の高さはすべて海拔高である。
9. 遺構表示は次のとおりである。

S B	獨立柱建物跡	礫石建物跡	S K	土壤	瓦溜め	
S A	櫛列	柱穴列	柱穴群	S D	溝跡	溝状遺構

目 次

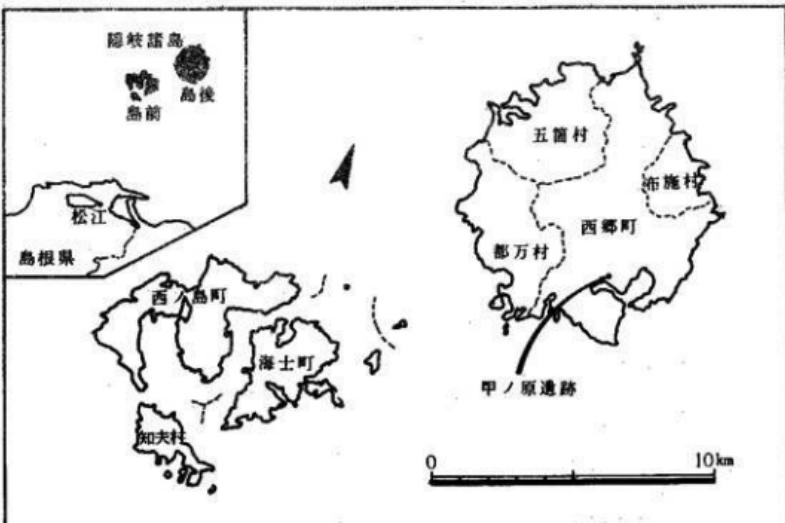
I 調査にいたる経過	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 調査の概要	4
IV 遺構と遺物	6
V おわりに	14

I 調査にいたる経過

隱岐郡西郷町下西は、古来より隱岐の中心として栄えてきたところで、以前より縄文時代から中世に至るまでの広範囲にわたって、多数の石器片、土器片等が発見されてきた。又、古墳の分布密度も非常に高い所でもある。中でも甲ノ原地区は、そうした付近の状勢や、その名前（国府ノ原の転覆ではないかとされている）などから隱岐の國府の所在地として推定されてきた所である。が、調査は進んでおらず、当遺跡の全容はつかめていない。

このように数多くの重要遺跡が存在する下西地区は、その殆んどが田畠であったことから、一帯は永く、その状態を維持できると思われていたが、この地にも開発の手がのびてくるようになつた。昭和30年代に入り、民間の住宅をはじめとして、公営住宅などが立ち並ぶようになり、又、隣接地には町役場、市の庁舎等も建設された。そして、それらを結ぶ道路網も拡張整備されるようになり、遺跡はその保存が次第に難しい状態になりつつある。

遺跡の保護対策を立てるためには、遺跡の正確、範囲等が正確に把握されていなければならぬが、この地区においては、前述のように調査が進んでおらず、それがなされていない。こうした急激な開発をみると、調査の必要性が強く呼ばれてきたところであった。そうして、今年度埋蔵文化財緊急調査事業として、国庫補助、県費補助を受けて発掘調査を行なうこととなつたのである。



第1図 遺跡位置図

Ⅱ 遺跡の位置と環境

甲ノ原遺跡と呼ばれている一帯は、島根県隠岐郡西郷町下西の台地上に所在する。隠岐諸島は島後をはじめとして、四つの住民島と数多くの無人島から成っており、面積246 km²の島後は最大の島である。当遺跡はこの島後に位置している。起伏のはげしい山地が発達するこの島の中で、西北の五箇村、南東の西郷町中条、東北の西郷町中村、西南の都万村の四地区にはまとまった平地を持っている。なかでも西郷湾に投する八尾川の形成した八尾平野は隠岐最大の穀倉地帯をなしている。甲ノ原はこの平野の一部に確認された条里田の南側にあり、東に中世の国府尾城跡西に隱岐國惣社玉若酢命神社があり、南はすぐ西郷湾に出る位置にある。

古来この一帯を含めた下西地区は、古代～中世の隠岐の中心地と推定されており、数多くの遺跡が分布している。^(註1) 開文時代の遺跡としては前期の大将軍遺跡、そして海岸沿いに前期中葉から後期末葉にかけての下西海岸遺跡などがある。^(註2) 弥生時代の遺跡としては、有木地区に月無遺跡がある。^(註3) この月無遺跡は古墳時代前期にまで続くものである。

古墳時代に入ると、この地区には多くの古墳が築造されているが、いわゆる前期古墳は少ない。^(註4) 5世紀代の古墳としては、当遺跡の北東方に奈京谷古墳群がある。これは円墳群であるが、中に2基、未確認ではあるが前方後円墳がある。6世紀代に入ると全長30～50 mの前方後円墳が出現し、周辺にも多数の小円墳が営まれるようになる。前方後円墳の代表的なものをあげると、玉若酢命神社西方古墳、國府原二号墳、月無遺跡の近くの名田第三号墳などがある。さらに1,200 m程西北方には、平神社古墳、子安神社古墳がある。

^(註5) 奈良朝以降になると、1,500 m程北方に國分尼寺跡があり、近くには國分寺が現存する。西方には、國分寺と同じ頃建立されたと考えられる權得寺跡がある。

隠岐國の惣社は甲ノ原の西方に祭られている。附近には馬場、大將軍、岩泉等歴史的に古い地名を有する地区が多く、ここから、古代の中央道とも思える道を北に進むと、隠岐國分尼寺跡、隠岐國分寺にあたる。この間に条里をはさんでおり、惣社→国庁→一条里→國分尼寺・國分僧寺というような古代のまちづくりが何らかの形で行なわれたと推定されれば、甲ノ原地区を含めた下西一帯が中核的地区として存在したと考えられてきたことは、ごく当然のことと思える。甲ノ原遺跡はこのような環境の中に存在する。

註1 藤田一枝「隠岐島先史時代の遺跡について」 隠岐郷土研究2号 昭和32年

註2 藤田一枝「隠岐島先史時代の遺跡について」 隠岐郷土研究2号 昭和32年

註3 田中慶治「隠岐島の歴史地理学的研究」 昭和54年

註4 勝部明生「奈京谷古墳」 関西大学島根大学共同隠岐調査会編「隠岐」 昭和43年

註5 隠岐島後教育委員会「隠岐國分尼寺調査報告」 昭和46年

註6 山本清「初期寺院跡」 関西大学島根大学共同隠岐調査会編「隠岐」 昭和43年

註7 田中慶治「隠岐島の歴史地理学的研究」 昭和54年



調査地周辺の遺跡

● 遺物散布地 ■ 前方後円墳 ● 円墳 ○ 墓形不明 □ 寺院跡 △ 城跡

- 1 尼寺原遺跡
- 2 關岐國分尼寺跡
- 3 平神社古墳
- 4 子安神社古墳
- 5 田中古墳群
- 6 月無遺跡
- 7 ヒノミサン古墳群
- 8 小田原宅蔵古墳群
- 9 オキダ屋横道跡
- 10 斎京谷北古墳群
- 11 斎京谷南古墳群
- 12 斎京谷古墳群
- 13 御穂神社古墳
- 14 緒古墳
- 15 楠得寺跡
- 16 国府原二号墳
- 17 二宮神社古墳
- 18 玉若酢命神社古墳群
- 19 玉若酢命神社境内古墳群
- 20 玉若酢命神社南方古墳群
- 21 德岐氏墓山古墳
- 22 白髮古墳群
- 23 国府尾城跡
- 24 下西海岸遺跡
- 25 西森氏宅裏遺跡
- 26 大座古墳群

III 調査の概要

調査は、甲ノ原及び能木原地内の畠地、その他の空地を選んで行なうことにして、その選定にあたっては地形、あるいは土器片等の散布状況などを考慮し数ヶ所の候補地をあげた。その中から栽培作物、土地の状態等の諸条件から調査可能な7地区を選び、発掘調査を行なった。発掘調査面積は784m²である。

調査区の設定にあたっては、対象区全域に方眼を組むことにし、能木原478番地の畠地の南端に基準杭を設定し、磁北線を基準にとり、それと直交する東西線を座標軸に2×2mの方眼を組んでグリッドの一単位とした。磁北線は西から東へ2m進むごとにE1、E2、E3、...、同様に東西線は南から北へN1、N2、N3、...とし、グリッド名は北東コーナーの交点の記号で呼ぶことにした。なお、前述の基準杭をN500 E500とした。

以下、各調査区ごとに概要を述べる。

1 第1調査区 下西字甲ノ原775番地 調査面積48m²

常角チョウ氏宅のすぐ前の畠地に設定したもので、N500 E500の基準点の西方約300m、N524～529、E358～362の位置にあたる。東側、北側は小さな台地を形成し、それらに挟まれた谷筋の出口の部分にある。そのための土砂の流入堆積と思われるが、地山面までは深い所で130cmもあった。遺構は柱穴16個が検出され、そのうち複列と想定できるものが1条(SA01)あった。

2 第2調査区 下西字甲ノ原786番地 調査面積80m²

第1調査区の道路を隔てて西側の所に設定したもので、N522～525、E341～346の位置にあたる。かっては水田であったというが今は埋めて畠地として使用している。地表下約40～70cmで地山面に達するが、遺構は検出されなかった。

3 第3調査区 下西字甲ノ原761番地 調査面積100m²

第1、第2調査区の南方約80mの道路のすぐ南側に設定したもので、N476～E480、E356～360である。この地もかっては水田であったという。地表下約70cm程掘り下げてもかっての水田面まで達せず、しかも出水が激しく、中途ではあったが調査を打ち切らざるを得なかつた。

4 第4調査区 下西字能木原478番地 調査面積100m²

基準点の近く、下西から西郷町役場方面へ通じる道路の北側の台地上の畠地に設定したもので、N506～510、E501～505である。この調査区と、後述の第5調査区を含む台地一帯は、地表面で容易に須恵器片が採集でき、調査前より要注意地区としていた所である。地表下約20～30cm位で地山面に達する程浅いために、遺構は上部がかなり削平されている。柱穴と共に、それによく似たものや、ほぼ東西に走る数本の溝が発見されたが、地元の人の話によると、

前者は茶の木、後者は桑の木のそれぞれ栽培のためではないかという。その話を裏付けるように、中の土質も柔かく、他の柱穴内の土質とは全く異なる。ただ、本来の遺構がそれらによって消滅した可能性はあるので記録にはとった。それらを含めて検出された柱穴は47個になり、その内、掘立柱建物跡と想定できるものが1棟（SB01）あった。遺物は地表面の散布状態から考えると意外に少なく、須恵器片、土師器片が僅かに見つかったにすぎない。

5 第5調査区 下西字能木原475番地 調査面積104m²

第4調査区の北方約100mの位置に設定したもので、N551～560、E481～487の位置にあたる。第4調査区と同様に遺構はかなり削平されている。遺物は少なく、検出された柱穴は25個である。ただ、その中の2個は北側のグリッド（N559～560、E486～487）で検出されたもので、一辺約60～90cmのはば方形に近い大きな掘方のものである。グリッドが小さいために2個しか検出されず、又、遺物も伴出されていないために不明な点が多いが、後述の第6調査区のSB03とも考え合わせて掘立柱建物跡（SB02）として取り扱うこととした。

6 第6調査区 下西字能木原470番地 調査面積250m²

第5調査区の北西方約40mの地に設定したもので、N564～574、E469～478の位置にあたる。北側は松林になっており、その中には斎京谷古墳群が連なっている。この調査区は栗の木が植えられており、そのため木の間を縫っての変則的な調査区となった。地表面までは約15～50cmと浅い。検出された遺構は、掘立柱建物跡6棟（SB03～0.8）、溝状遺構一つ（SD01）である。掘立柱建物跡6棟のうち1棟（SB03）は、一辺約80～100cmの大きな掘方をもつたものであるが、柱穴全部が検出されておらず、建物全体の規模は分からぬ。遺物はSD01に伴いかなりの量の土師質土器片と若干の須恵器片が出土した。又、耕土中からも、僅かではあるが須恵器片、土師器片が出土した。

7 第7調査区 下西字能木原462番地 調査面積102m²

第6調査区の南西方約130mの地に設定したもので、N531～538、E412～428の位置になり、第1調査区の東方約100mにあたる。この調査区は北側に葉煙草耕作用の畑地、南側には宅地があり、設定にあたっては他の調査区のように磁北線を基準にした座標軸に合わせることをせず、地形に合わせて可能な限り広く設定した。検出された遺構は柱穴29個、そのうち横列と想定できるもの1条（SA02）、又、調査区中央よりやや東よりの地点で約260cmの間隔で検出された2個の柱穴は、その形状、柱穴内土壤、底部の高さ等からほぼ同じものと認められるため、掘立柱建物跡（SB09）として取り扱うこととした。その他に溝状遺構3（SD02～04）、土壙1（SK01）が検出された。土壙は溝状遺構のうちの一つ（SD04）を掘り下げている時に検出されたもので、SD04のために上部が削られていて、底部が僅かに残っているにすぎない。遺物は、SK01、SD04に伴いかなりの量の土師器片と若干の須恵器片が出土している。

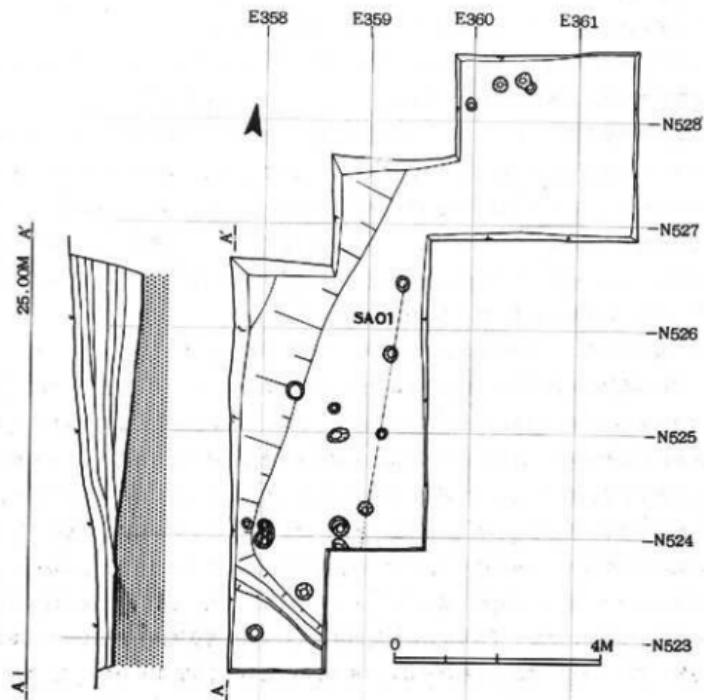
N 遺構と遺物

前節で概要を述べたが、この項では検出された遺構、遺物についてやや詳しく述べることにしたい。ただし、調査面積が狭く、検出された遺構も殆んどが全容を現わしてはおらず、確かな性格をつかみきるところまではいっていない。又、遺物についても十分に整理を行なっておらず、ここでは SD01、SD04 の出土遺物を中心に、その概要を記す程度にとどめたい。

第1調査区

遺構

S A 01 ほぼ真北方向を向き、約 150 cm の間隔で 3 間分検出されている。柱穴は円錐形に掘り込まれており、埋土は暗褐色土で、底部には薄く青灰色の粘質土が入っている。西半の落ち込みの肩の部分から約 1 m 程離れて並行している。



第4図 第1調査区実測図

遺物

耕土中より須恵器片、土師器片が数点見つかっているが、小片のため詳細は不明である。

第2調査区

遺構は検出されなかった。遺物は、耕土中より須恵器片、土師器片が僅かに見つかっている。

共に小片で、特に土師器片は風化が激しく、年代等については判断し難い。

第3調査区

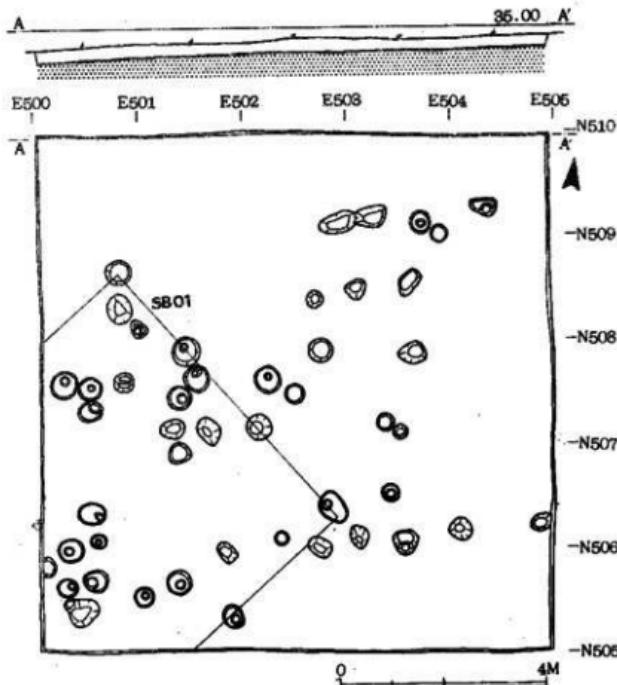
遺構については中途で調査を打ち切ったため不明である。遺物は耕土中より黒曜石片、若干の須恵器片、陶磁器片が見つかった。このうち注意すべきは黒曜石片の量が多く、なかには加工痕の認められるものもあるということである。ただし、黒曜石片を含むこの耕土は、前節で述べたように他から運んできたものであり、今のところどこから運んできたか不明である。

第4調査区

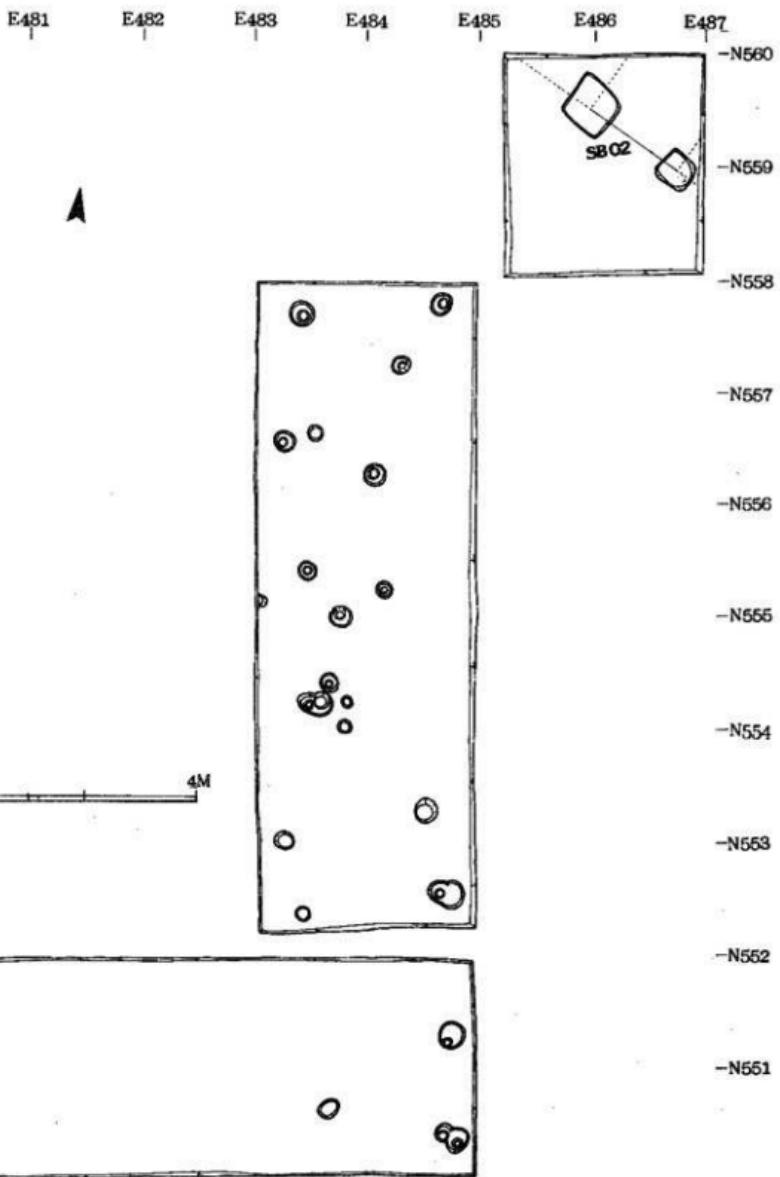
遺構

SB01 北

西から南東方向
が3間（柱間距
離210cm）、
北東から南西方
向が1間分（柱
間距離270cm）
検出されている。
柱穴はいずれも
小さい円形で、
径30～50cm、
深さ10～15
cmである。柱径
は大体15cm前
後である。掘方
の埋土は、赤褐
色ないし暗赤褐色土である。柱
痕の埋土は黒褐
色土で、炭化物
を含んでいるも
のもある。



第5図 第4調査区実測図



第6図 第5調査区実測図

遺物

耕土中、あるいは柱穴内より須恵器片、土師器片が若干出土している。いずれも小片で年代等詳しいことは不明である。ただ、柱穴からの出土品の中で、一点だけ形の分かるものとして、須恵器の蓋がある。これは小片ではあるが、内面にかえりを持つもので、およそ7世紀前半から
(註1)中期にかけてのものと思われる。

第5調査区

遺構

SB02 柱穴は2つ共に上部がかなり削平されており、残存部分の深さは5~10cmしかない。埋土は黄褐色土で地山ブロックを含んでいる。柱痕もはっきりしないが、掘方のほぼ中央に柱が立てられたと仮定すると、柱間距離190cm、建物方向は磁北に対し、N35°Eとなり、後述のSB03とはほぼ同じである。

遺物

耕土中より須恵器片、土師器片が若干出土している。又、柱穴からも土師器片が数点出土してはいるが、いずれも小片で、表面も風化しており、年代、器形等詳しいことは分からぬ。

第6調査区

遺構

SB03 柱穴は4個しか検出されておらず全容は分からぬ。柱間距離は南北方向は約190cm等間、東西方向は210cmである。南北方向の柱列は、磁北に対し約36°東に偏している。掘方は径80~100cmで、やや不規則ではあるが方形ないし隅丸方形である。柱痕径は30~35cmを測り、埋土は淡黄褐色土で炭化物は含まぬ。掘方の埋土については一箇しか調査していないが、土層は単層で黄褐色を呈し、赤褐色のブロックを多く含んでゐる。

SB04 南北2間、東西3間の掘立柱建物跡である。柱穴径は平均して約40~45cm位で、柱痕径は15cm前後である。柱痕の埋土は暗褐色土で炭化物を含んでおり、掘方の埋土は黄褐色を呈し、赤褐色あるいは茶褐色のブロックを含んでいる。なお、このSB04は後述のSD01と重複しているが、切り合い部分の土層の観察から、SB04(古)→SD01(新)という関係が明らかであった。

SB05 2間×1間の掘立柱建物跡で、柱穴の形状、土質等はSB04とほぼ同質である。

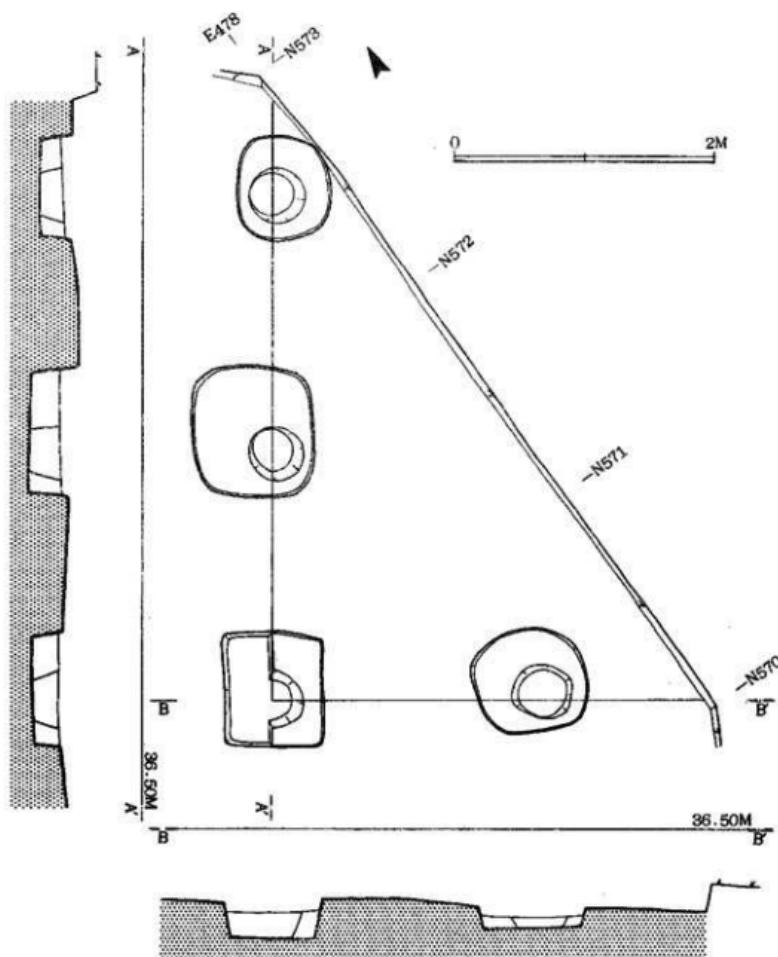
SB06 南北4間、東西1間の掘立柱建物跡である。ただ、この建物は北側にのびる可能性もある。柱穴は径20~30cm、柱痕径は10cm前後と小さいものである。柱の並び等も、SB01~05と比較すると粗雑な感を受ける。柱穴内土質はやや青味がかった淡黄褐色土で、SB01~05のそれより若干柔かい。柱穴内より土師質土器片が数点出土している。

SB07 南北2間、東西は北側が2間、南側は1間の掘立柱建物跡である。柱穴の形状、土質等はSB06とほぼ同じで、この柱穴からも土師質土器片が数点出土している。

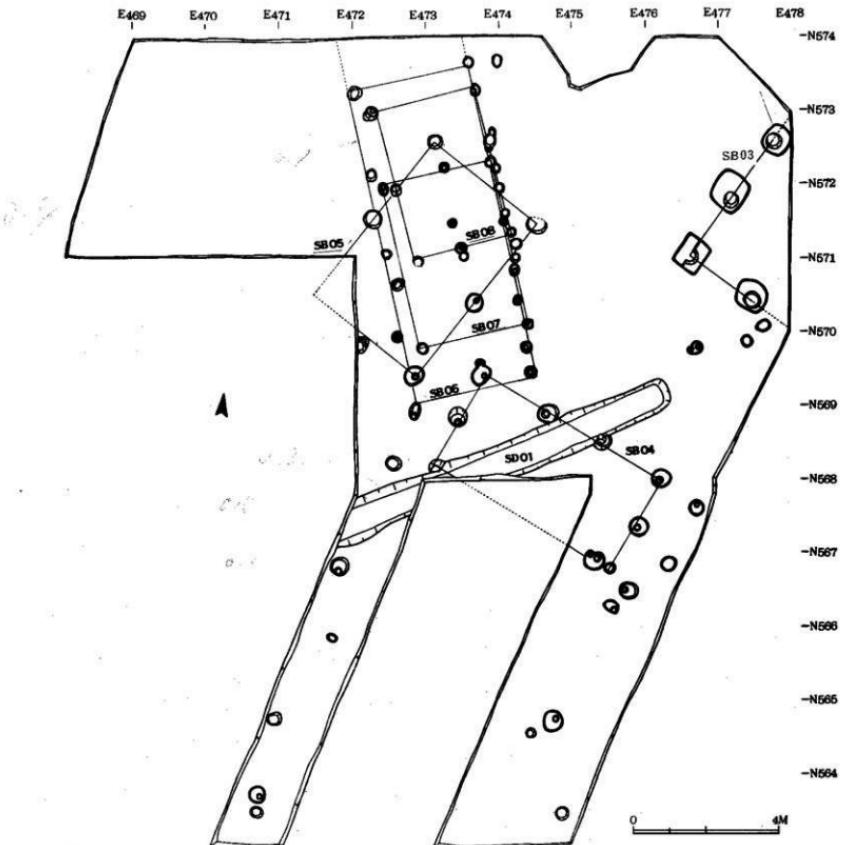
SB08 南北2間、東西は北側1間、南側2間の掘立柱建物跡である。柱穴の形状、土質等

は SB06～SB07 とはほぼ同じである。

SB05～08 の 3 棟の埴物はその方位、柱の並びが割と粗雑であること、柱穴の大きさ、形状等から、建て替えの期間を除いてほぼ同時期のものと認められる。又、後述の SD01 とも、出土品を比較検討してみると、やはり同時代のものと思える。



第 2 図 SB03 実測図



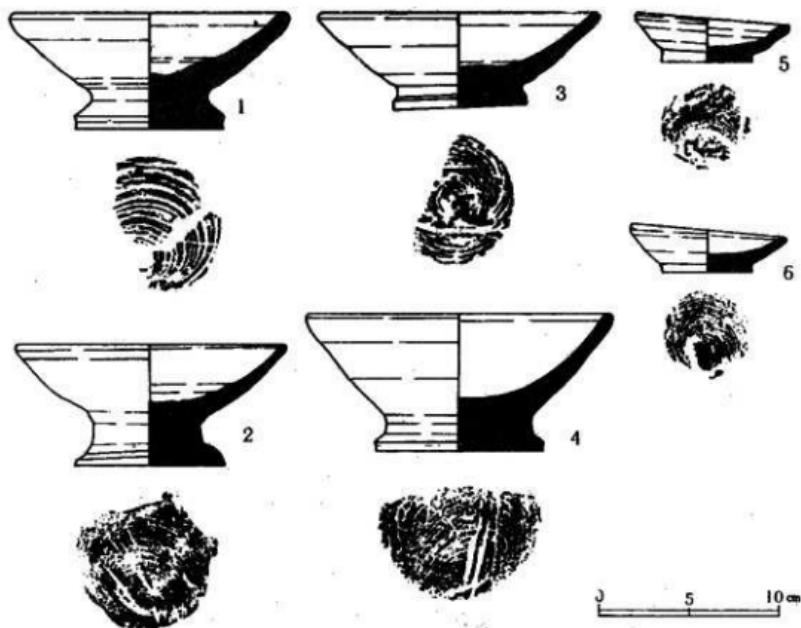
第6回調査区実測図

SD01 SB06～08の南側では東西に走り、幅約1mである。深さは、東側の溝の始まりの部分では約15cm、検出された西端では約35cmとなる。かなりの量の土師質土器片と若干の須恵器片が出土している。年代としては、この土師質土器（後述）から9世紀末以降のものと思われる。が、供伴している須恵器の壺片により中世までは下らないものと思われる。

遺物

耕土中から若干の須恵器片と極く僅かの土師器片が出土しているが、小片のため詳細は不明である。ここではSB06～08、SD01から出土した土師質土器について検討を加えたい。

今回出土した土師質土器は皿、脚付杯、平底杯が殆んどで、底部には糸切り痕が見られる。堅さは須恵器と土師器の中間位である。土師質土器については隔壁はもとより、山陰の他地域においても類例が少ないため、不明な点が多く、編年作業は進んでいない。ただ、底部の切り離しに(註2)糸切り手法を用いている事から、島後の他地域の状況とも比較してみると9世紀末葉以降のものと思われる。いずれにしても今後の研究が待たれるところである。



第9図

SD01出土土師質土器実測図

第7調査区

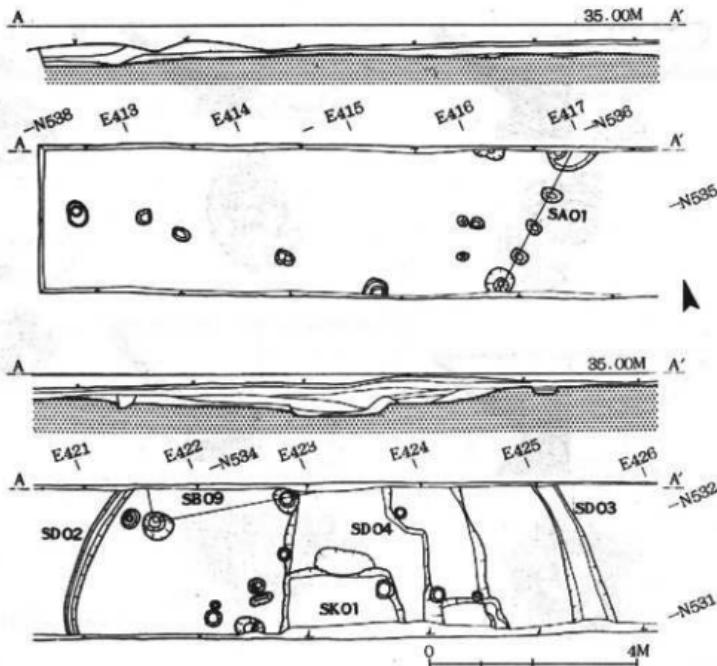
遺構

S A 0 2 磁北に対し、約45°東に偏した方向で4間分検出された。柱間距離は短く、平均約70cmである。柱穴内より須恵器片が出土しているが、小片のため詳細は不明である。

S B 0 9 ほぼ東西に1間分検出されている。柱穴は2つともしっかりしており、径約50cm深さは50~60cmである。SD04と重複しているが、切り合い部分の土層の観察によると、SB09(古)→SD04(新)という関係が明らかである。

S D 0 2・S D 0 3 SD04の西側、東側にそれぞれ位置する。性格は不明であるが、溝内の土質の状態は酷似しており、同時期ものと思える。SD03では底部から土師器片、肩の部分からは弥生式の土器片が出土しており、年代の判定はしづらい。

S D 0 4 ほぼ南北に走る。東側は二段に掘り込まれている。溝内の土層は上層と下層に分けられ、下層からは土師器片、上層からは若干の土師器片、須恵器片が出土している。



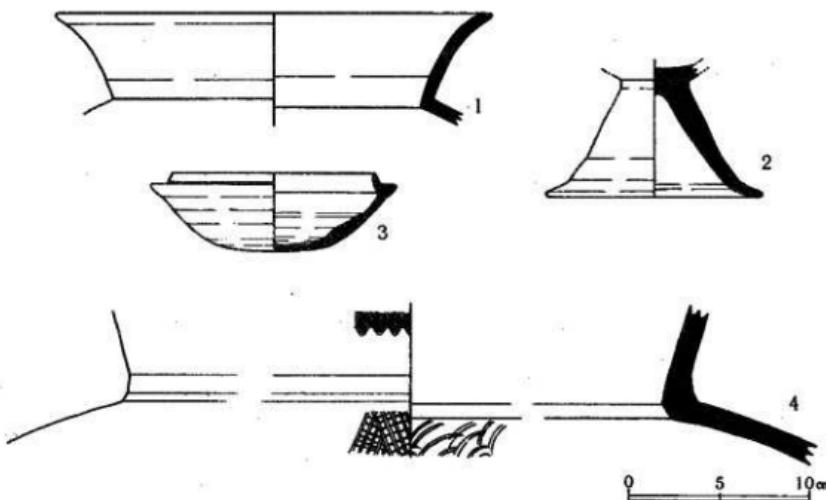
第10図

第7調査区実測図

SK01 SD04 によって上部が削平され、残存部分の深さは 10 ~ 20 cm である。大きさは東西方向約 220 cm、南北方向は全容は分からぬが、検出された部分は約 100 cm である。土師器片が出土している。

遺物

SD03 の肩の部分から、弥生式土器片が出土している。極く小片のため器形その他 詳細は不明であるが、凹線文があることなどから後期のものと思える。SK01からは黒色土師器片が出土しているが、小片のため器形その他不明である。SD04 の出土品は大別して上層と下層とに分けられる。下層からは土師器片が出土しており、なかには黒色のものもある。大半は小片であるが一点だけ形の推定できるものがある。腹部から口線にかけて、ゆるやかな曲線を描いて外反している。壺形土器と思われるが、胴部以下が見つかっていない。上層からは須恵器片、土師器片が若干出土している。須恵器片のうち一点は坏である。小片ではあるが、やや内傾した低い立ち上がりを持っていることなどから、6世紀末から7世紀初頭の頃と思える。土師器片では、高坏形の脚部が出土している。



第 11 図 SD04 出土土器実測図 (1, 2 土師器 3, 4 須恵器)

註1 松江市教育委員会「出雲国府発掘調査概報」昭和46年

註2 昭和54年に島根県教育委員会が行なった西郷町の尼寺原遺跡発掘調査において、糸切り麻を有する土器が1点だけ検出された。この遺跡は出土した土師器、縄縫陶器等から、およそ5世紀末から9世紀末あるいは10世紀初頭にかけてのものとされている。

註3 倉吉市教育委員会「伯耆国分寺跡発掘調査報告」昭和46年

註4 山本清「山陰の須恵器」(山陰古墳文化の研究)昭和46年

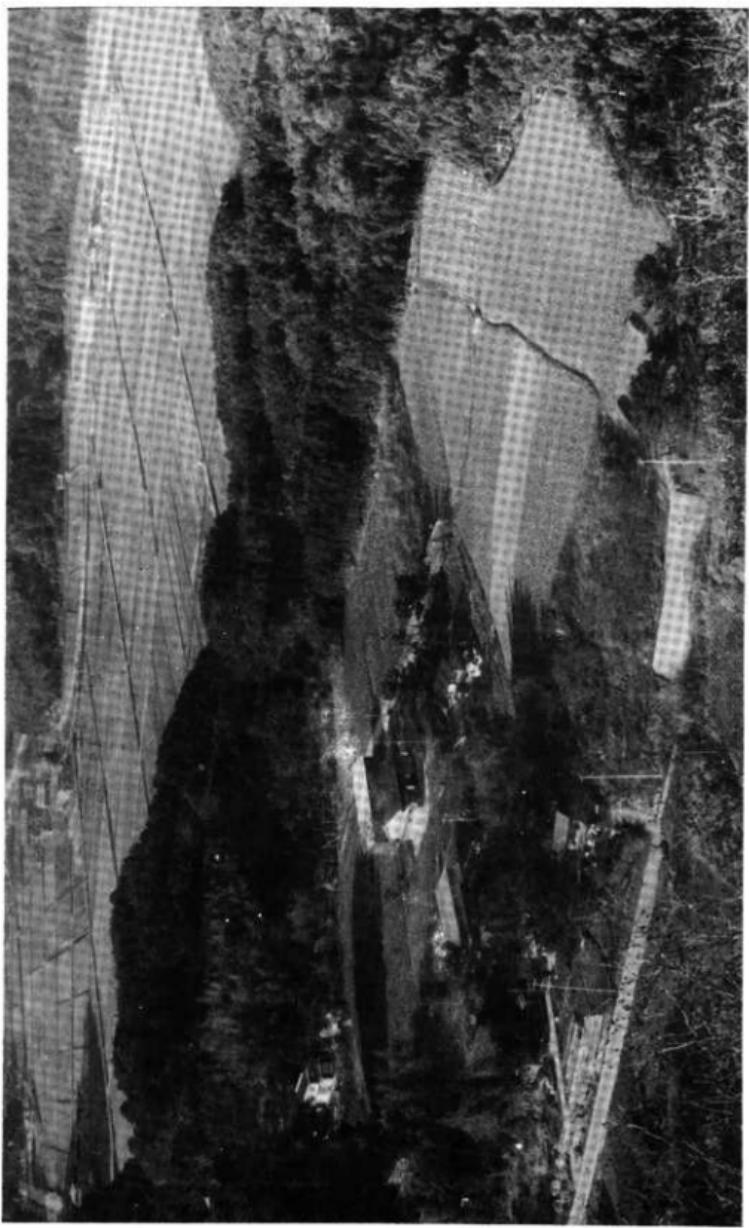
V おわりに

調査はかなり広範な地域を対象とし、小面積の調査区を点々と 7ヶ所にわたって発掘調査を行なったわけであるが、一、二の調査区を除いてほぼ万遍なく遺構、遺物が検出された。このことは、当遺跡周辺の古墳、寺跡等と共に、下西地区の古くからの歴史を物語るものである。と、同時に、甲ノ原遺跡の性格、範囲等がはっきりしない今、宅地等の土地開発が進む中で、遺跡の保護の困難性をも示している。

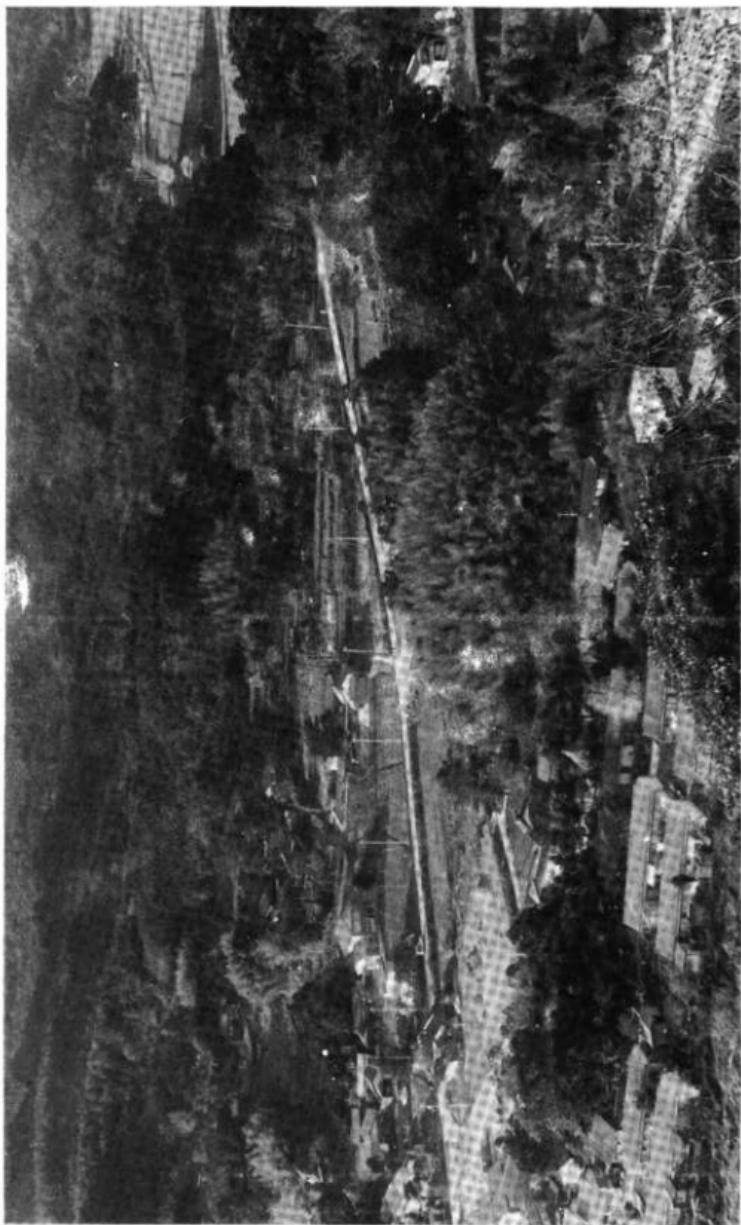
検出された遺構は、掘立柱建物跡 9 棟、棚列 2 条、溝状遺構 4、土壙 1 である。又、弥生後期から奈良時代平安時代に至る各種の遺物が出土した。ここでは第 5、第 6 調査区を中心に、歴史時代の遺構、遺物について検討を加えることにしたい。

この第 5、第 6 調査区の遺構は大別して二時期に分けられると思われる。一つは SB06～08 と SD01 の属する時期である。これらは、伴出した遺物が類似した様相を持っていること、建物方向や柱穴の形状等が酷似しているなどの点から同時期と推定される。伴出した遺物から判断すると、前節で述べたように 9 世紀末葉以降と思われるものであった。他の一期は、SB02～05 の属する時期である。これらは、建物方向がほぼ同じである、柱の掘方、並びがしっかりしたものを持っている。SB02 と SB03、SB04 と SB05 はそれぞれ柱穴の形状、埋土の土質が類似していることなどから同時期のものと言える。うち SB04 は SD01 と重複しており、その切り合い関係を見ると SB04 の方が古い時期となる。したがって、SB02～05 は 9 世紀末葉以前の時期と比定することができよう。又、SB02～05 を、かなり離れてはいるが第 4 調査区の SB01 と比較してみると、同様に建物方向、柱穴の形状その他から同時期の可能性が強い。のことから、9 世紀以前の建物等については、この台地上においてはかなり企画性を持って建てられていたともみられる。さらに SB02、SB03 は方形の大きな掘方を持つ建物跡で一般的な集落跡と考えるよりは、公的な性格を持った建物跡と考える方が良いと思われる。いずれにしても不明な点が多く、今後の調査研究を待たねばならない。

湖查地速景（能木原地区）

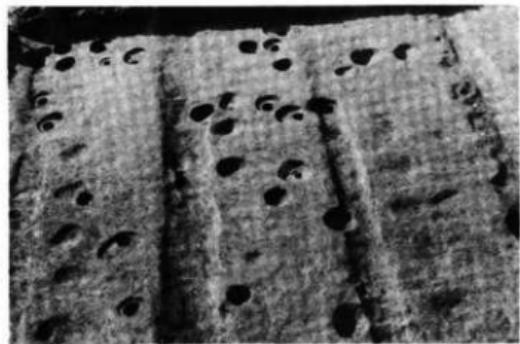


調查地“造”景（甲ノ原地区）

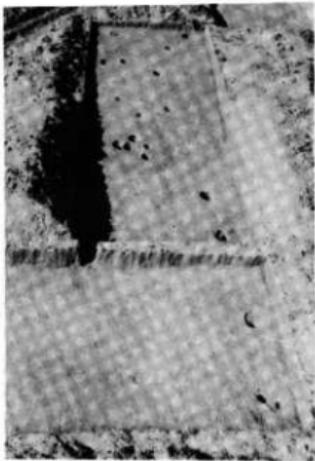




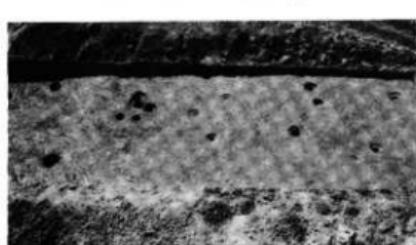
第 1 調 査 区（北から）



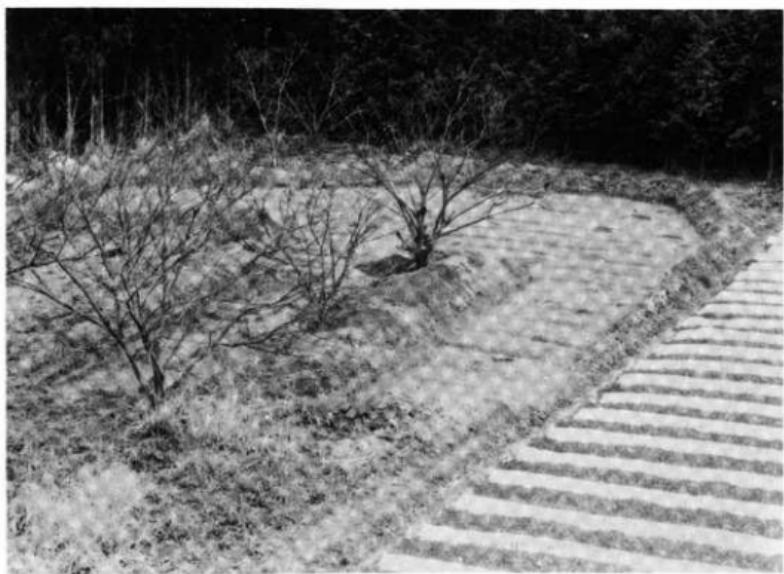
第 4 調 査 区（東から）



第 5 調 査 区（南から）



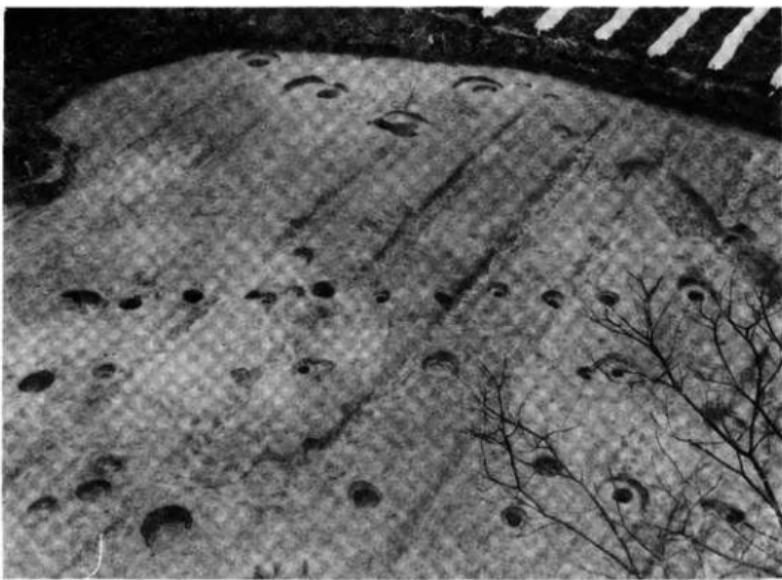
第 5 調 査 区（東から）



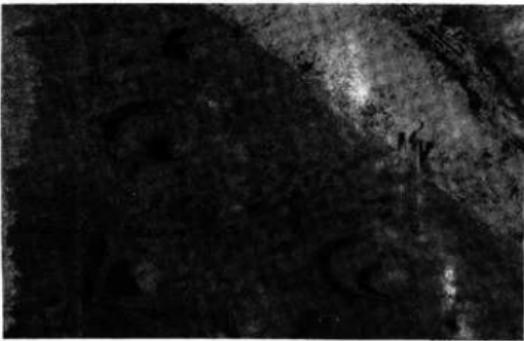
第 6 調 査 区 (南から)



第 6 調 査 区 (南から)

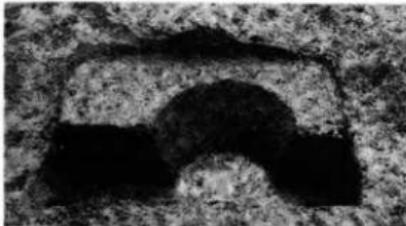


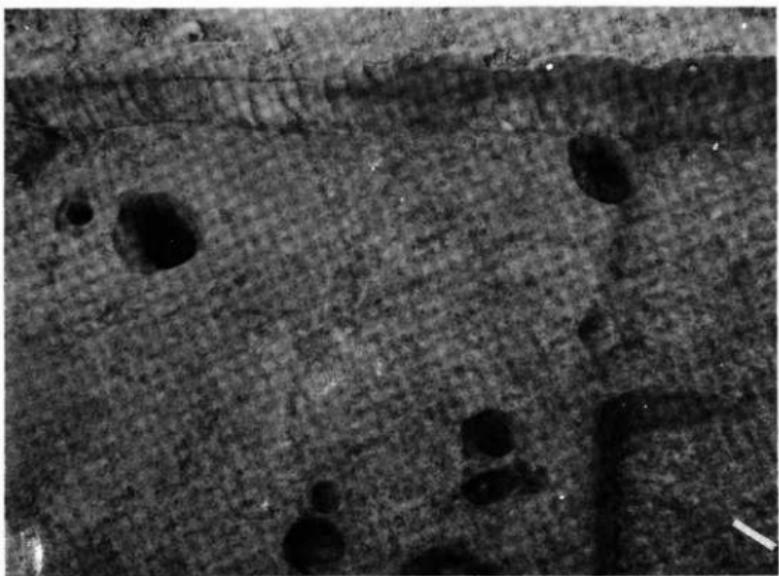
第6調査区（西から）



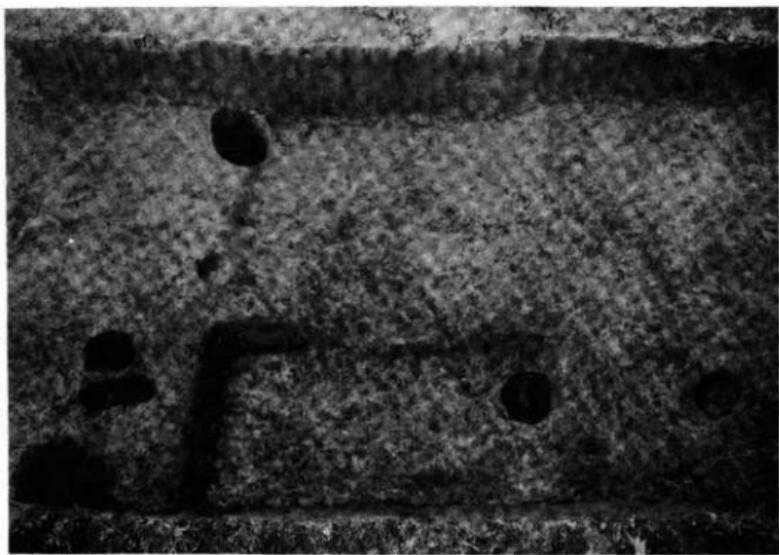
SB03（南から）

SB03
柱穴（西から）

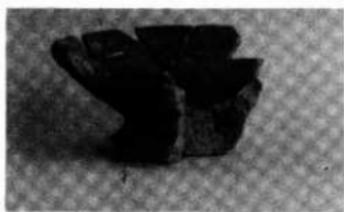




S B 0 9 (南から)



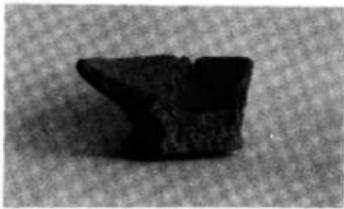
S K 0 1 . S D 0 4 (南から)



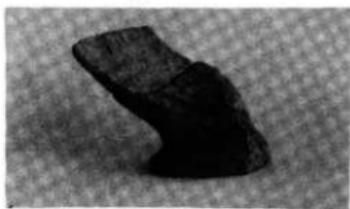
11 - 1



11 - 2



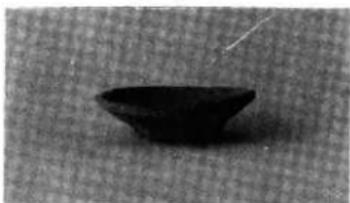
11 - 3



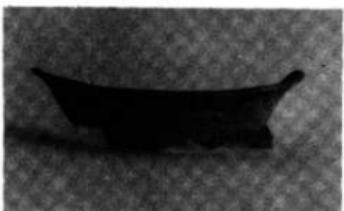
11 - 4



11 - 5



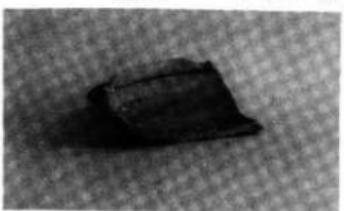
11 - 6



13 - 1



13 - 2



13 - 3



13 - 4

甲ノ原遺跡発掘調査概報

昭和 55 年 3 月

編集・発行 隠岐島後教育委員会
西郷町西町八尾

印 刷 福 徳 印 刷
西郷町西町名田